校長室便り　**青　空**　８月６日に寄せて　　№360　2023．８．６

夏休みに入って２週間が過ぎた８月３日、全校出校日に多くの子が元気な笑顔で登校してきました。「お久しぶりです」と通用門の前で立っている私に声をかけてくれた子もいます。跳び上がりたいくらいうれしくなりました。

全校集会では、例年この時期には、戦争に関わる話、平和をテーマとした話をしています。今回も話しましたが、内容が盛りだくさんだったため、以下の部分については、準備しつつも省略してしまいました。

今から15年以上前に読んだ月刊誌の記事ですが、少し概略を紹介します。

８月６日、広島の平和記念公園で平和祈念式典が開催されます。その公園内に、引き取り手がない遺骨を納めた原爆供養塔があります。その原爆供養塔の掃除を４０年以上にわたって続けられたのが被爆者の１人、佐伯敏子さんです。佐伯さんは「原爆供養塔の守り人」とも呼ばれる方です。６年ほど前に亡くなられました。

佐伯さんが原爆供養塔の掃除を始めたのは昭和２０年８月６日がきっかけです。その日の朝、佐伯さんは広島市から山を１つ越えた田舎の姉の嫁ぎ先にいました。敵か味方か、山の上を飛行機が１機飛んできて、すぐに引き返すのが見えました。そのときです。山の向こう、広島のほうの空を異様な光が焦がしたのです。間もなく大音響がして、熱気を帯びた空気に包まれました。

気がつくと、広島のほうにもくもくと煙が立ちのぼっています。空が曇り、黒い大粒の雨が降ってきました。

「広島がやられた」

佐伯さんは広島に住む家族、母や兄妹たちのことを思いました。その思いに急かされて、佐伯さんは山を越え、広島にもどったのです。

そこで見たもの。それは、まさに生き地獄。佐伯さんは家族の姿を求めて歩き回りました。

ふと、死体のように横たわっていた人がむくりと動いて、私の足首をつかみました。佐伯さんはそれを振り切って進みました。

「助けて」「水を」と動けなくなった人たちの呼びかける声に耳をふさいで通りすぎました。どこが道かもわからないままに、死骸を踏みつけて歩きました。

あのとき、自分に何ができたろうかと佐伯さんは思いました。何もできなかったでしょう。だが、助けを求める何人かの人を見捨てたことも事実です。佐伯さんはそのことで後ろめたさを抱きました。原爆供養塔には、私が見捨て、無視して通りすぎた人たちの遺骨が、納まっているかもしれない。

「ごめんなさい」　「すみませんでした」

佐伯さんは、習わぬお経を唱えながら、ホウキで掃き、草を１本１本むしらずにはいられませんでした。そうして、４０年以上が過ぎたということです。